

発掘調査

速報展

2006

土佐の戦国時代と近世城下町

考古学は未来の羅針盤



2006.10.16～2007.3.23

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

発掘調査速報展 2006

一土佐の戦国時代と近世城下町一

土佐の戦国時代

戦国時代の代表的な遺跡としては、中世^{じょうかく}城郭・城館^{じょうかんあと}跡があげられます。県内においては714の城郭・城館が確認されており、現在までに41城跡の調査が行われています。今回は土佐を統一した長宗我部氏の居城である岡豊城跡^{おこうじょうせき}・高知城跡(大高坂山)^{うらどじょうせき}・浦戸城跡の遺構の変遷から、城郭の発掘例が多い四万十市域の城郭の特徴、また最近注目される戦国期の遺跡として、坂本遺跡、西山城跡の出土遺物を展示しました。

岡豊城跡^{おこうじょうせき}(南国市岡豊)

戦国時代土佐を統一した長宗我部元親^{ちようそかべもとちか}の居城で、天正16年(1588)、大高坂山(現高知城)に移るまで、土佐の中心城郭として機能した城跡です。県史跡整備に伴い、史跡部分の詰^{つめ}、詰ノ段、二ノ段、三ノ段、四ノ段、伝^{でん}威跡曲輪^{うゑあとくわ}の調査が行われ、礎石建物跡^{そせきたてものあと}、石敷遺構^{いしじきいこう}、地鎮遺構^{じちんいこう}、土塁^{どるい}、堀切^{ほりきり}、井戸^{いど}、虎口^{こぐち}などの遺構が検出されました。近年伝家老屋敷曲輪^{でんかろうやしきくわ}の調査が行われました。曲輪の入口と考えられる柱の穴等が確認され、城の大手口に当たる可能性が高いと考えられています。出土遺物では、多量の土師質土器^{はじしつどき}、貿易陶磁器^{ぼうえきとうじき}や古銭^{こせん}等とともに火縄銃^{ひなわじゅう}の弾、犬形土製品や懸仏などが出土しています。また、「天正三年」(1575)銘の丸瓦が出土していることから、この時期には瓦葺きの建物が構築されていたと考えられています。



礎石建物跡と石積み遺構

扇城跡^{おうぎじょうせき}(四万十市具同)

四万十川の支流である中筋川の北部標高55mの丘陵上に立地しています。南へ延びる尾根の南端部には、渡川^{わたりがわ}の合戦(天正3年<1575>)の際に一条氏側が陣を張ったといわれる栗本城跡^{くりもとじょうせき}、同尾根上の西側にはナリカド城跡が連なっています。発掘調査では5ヶ所の曲輪と6条の堀切^{ほりきり}、掘立柱建物跡^{ほったてばしらたてものあと}・柵列^{さくれつ}・土坑^{どこう}・段状遺構^{だんじょういこう}を確認しました。遺物では、土師質土器^{はじしつどき}・白磁^{はくじ}・青磁^{せいじ}・染付^{そめつけ}・備前焼^{びぜんやき}等がみられますが、中でも中国製の青磁が多く出土しています。調査成果から見て、渡川の合戦以前の段階(15世紀代)から山城が恒常的に使用されていたことが明らかとなりました。



扇城跡全景

にしもとしょうせき
西本城跡(黒潮町大方)

西本城跡は黒潮町大方上田ノ口の標高 40 ～ 50m 前後の北東から南東に伸びる尾根上に立地しています。小規模な城郭ですが、堀切と堅堀を構築した堅固な構えをもっています。立地面では、田ノ口地区を一望することができ、入野～四万十市(中村)間の往路と馬荷への入口を抑えることができる場所に作られています。交通の要所を抑えるとともに、集落の防御を目的とする性格を備えた城郭といえます。



西本城跡全景

さかもとせき
坂本遺跡(四万十市)



瓦窯跡

坂本遺跡は四万十市坂本に所在し、中筋川と四万十川の合流地点に近く、足摺方面に向かう国道 56 号線にも隣接した交通の要衝となっています。

歴史的に重要と考えられる遺跡として、すぐ西側山上に位置している香山寺跡があり、坂本には現在でも山上に向かう参道の入り口が残されています。

建物跡・瓦窯跡・石段状遺構・基壇状遺構などが検出され、特に 15 世紀代の瓦窯跡がほぼ完全な形で残存している例は全国的にも少なく、貴重な遺跡と言えます。出土した遺物には、貿易陶磁器・土師質土器・瓦・漆器・古銭などがあります。

にしやましょうせき
西山城跡(中土佐町)

西山城跡は、中土佐町久礼に所在する山城で、国道 56 号線沿いの三河川によって形成される沖積平野に三方を囲まれた標高約 70m の丘陵上にあり、頂上からは四方を見渡すことのできる最高の立地条件にあります。城跡には、尾根を遮断する大規模な堀切が南北両端に作られ、東西の斜面には堅堀、畝状堅堀群があり、堀切は堅堀を連結し、高い切岸でしっかりと主郭を守る構造にしています。

城跡からは、搥鉢・甕・火鉢など日常雑器類や風炉・茶臼・四耳垂の茶道具など当時の生活を知るうえで貴重な遺物が出土しています。なかでも、貿易陶磁器の占める割合が高く、城館クラス以上の遺跡でしか出土しない青磁花瓶(県内初出土)をはじめとする奢侈品が見られることから有力者の存在が考えられています。



西山城跡全景

コラム ～土造りの城から石造りの城へ～

全国的に城郭の構築方法は、山を崩して曲輪を造り、堀を掘って土塁を盛るといった土造りから石垣や礎石建物を使用した石造りに変化してきます。土佐でも同様に戦国期の城郭はそのほとんどが“土造りの城”です。長宗我部が土佐を統一して以降、それまで存在した城郭は淘汰され、岡豊城、浦戸城、中村城のような拠点的城郭のみとなり、石垣、礎石建物、瓦を用いた“石造りの城”へと移行していきます。

自然地形を利用
した土造りの城



西山城跡



西本城跡

礎石建物や石積み、
瓦が使用される



岡豊城跡
礎石建物跡



高さ3m程度の
石垣が造られる



高知城長宗我部期の石垣



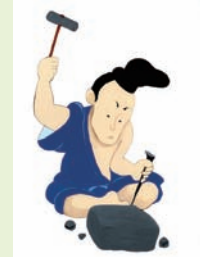
浦戸城跡の石垣



天守や高石垣が
造られる



高知城跡



浦戸城跡(高知市)

城跡が立地する浦戸周辺には「月の名所」桂浜があり、南には広大な太平洋が広がっています。

天正19(1591)年、豊臣秀吉の対外政策「文禄・慶長の役」に備える水軍の拠点とするため、長宗我部元親によって港湾の立地に優れた浦戸城の再編成が行なわれます。この時

に丘陵中心部を改修し、天守台・石垣・瓦などの構造をもつ近世的な城郭が造られます。発掘調査では、石垣の一部と建物に葺かれていた瓦などが発見され、古絵図(『皆山集』『浦戸古城跡図』所収など)に描かれている浦戸城跡の東側出丸部分の構造を知る上で重要な成果を得

ることができました。慶長6(1601)年には、山内一豊が土佐に入国し、同8年の高知城本丸の完成までの間、浦戸城に居城します。浦戸城跡の現状は各種開発で改変されていますが、大高坂城(高知城)とともに土佐の中核的な城として位置づけられ、中世城郭から近世城郭への変遷が追える数少ない重要な城跡です。



浦戸城跡遠景



詰石垣

山内氏と近世城下町

関ヶ原の戦い以後、山内氏が幕府から土佐国を拝領し、1601年には高知城の築城が始まります。それとともに高知城周辺には城下町が形成されていきます。近年、高知城内及び武家屋敷跡の発掘調査が行われ、藩政当時の遺構や遺物を確認することができました。また、高知城関連の絵図と発掘成果との検討がなされてきています。

高知城跡(高知市)



三ノ丸の石垣解体工事



石垣裏排水施設

県民のシンボリックな存在である高知城の歴史は、南北朝時代の太田高坂松王丸が築いた太田高坂城にはじまります。天正16(1588)年には長宗我部元親が居城を岡豊城からこの地に移転し、天正19(1591)年に浦戸城に移るまで居城したと考えられています。

慶長5(1600)年、関ヶ原の戦いの後、新しく土佐の国主となった山内一豊が、翌慶長6年には高知城の築城に着手し、慶長8(1603)年、本丸・二ノ丸の完成を待って入城しました。その後土佐は高知城を中心とした山内藩制が続きます。城内では御台所跡、黒鉄門の調査が行われ、御台所跡では17世紀初め

の遺構が見つっています。ここ数年は本丸・三ノ丸の石垣整備に伴う調査が行われ、石垣裏からは石垣構築当初の排水施設が見つっています。また、三ノ丸では現在の石垣裏から長宗我部期と考えられる石垣が確認されました。さらに、その石垣裏からは四国で初めての桐紋瓦が出土し、注目を集めました。

こうちじょうでんしもやしきあと 高知城伝下屋敷跡(高知市)



出土した荷札

こうちじょうでんしもやしきあと
高知城伝下屋敷が立地する大高坂山を中心とした沖積平野には17世紀中頃に約2万人の人口を抱える“城下町高知”が形成されました。伝下屋敷跡は高知城内堀の南西部分西の外側に位置し、現在は高知地方裁判所となっていますが、郭中でも上級武士の屋敷が並ぶ区域であり、寛文年間(1661～72)の郭中図には「御下屋敷」としてその配置が描かれています。検出された遺構には、近世前期のものと、近世後期～近代初期にかけてのものがあります。

遺物としては、藩主の屋敷の屋根に葺かれていた瓦や屋敷で使われていた日用品などが数多く見つかり、当時の城下の人々の生活を垣間見ることができます。

しせきこうちじょうまるのうちのりくち 史跡高知城丸ノ内緑地(高知市)

高知城の南東隅に位置し、現在は公園として利用されています。高知城を描いた正保年間(1644～1647)の絵図では、「侍屋敷」の記述がみられ、その後の寛文9年(1669)の絵図では「馬場」として利用されたようです。調査の結果、江戸時代後期の石組みの水路遺構が2ヶ所で確認され、当時城内の排水に力をいれていたことがわかりました。また、17世紀前半ごろの柱穴や溝跡、鍛冶関連遺構も見つかりました。出土遺物の時期から考



水路遺構

えると、絵図にある「侍屋敷」の一部ではないかと考えられます。堀の内側の調査も同時に行われました。絵図には現在の堀より7m程広い12間(約24m)の堀とその内側には高さ1間4尺(約3.3m)の土手が描かれています。明治期と昭和期には堀の一部が埋められ、現在の堀幅となったようです。調査では、絵図と同様に堀の内側で土手状の遺構を確認することができました。当時は、現在のようないしがき石垣で構築されていたわけではなく、土手で形成されていたことがわかりました。

コラム～桐紋瓦について～

桐紋の軒丸瓦が出土したのは四国では高知城跡が初めてです。城郭じょうかくにおいて、最も古い桐紋瓦が出土しているのは、安土城跡あづちじょうせきで、信長が朝廷より桐紋の使用を許され、瓦に使用したのが始まりと言われています。秀吉も同じく、朝廷の権威を利用し、官位叙任による家臣の支配政策に「桐紋・菊紋」を利用しました。従五位下クラス以上の家来や武将に対し使用を許しており、当時正五位上であった長宗我部元親も許可されていたと考えられます。家康は、この「桐紋・菊紋」の恩寵おんけいを辞退していますので、山内氏も同様に使用していません



出土した桐紋瓦



かったと思われます。高知城では、山内氏が長宗我部期の石垣を改築した際に、瓦を使用していた建物を壊し、裏込め石とともに投棄したものと思われ、現在のところ、この桐紋瓦を使用していたのは長宗我部氏と考えられています。

城郭用語

- ★縄 張 築城の平面プランを指す名称で、築城に際し縄を張り巡らせたことに由来しています。
- ★くるわ 「くるわ」と表記する漢字には郭と曲輪があります。郭は「かく」とも読み、都市を囲む城壁などの防御施設を指します。曲輪は防御施設に囲まれた内部の平らな面を指します。曲輪は近世の城郭では本丸、二ノ丸、三ノ丸などと形態が円形だったので「丸」を使ったということです。本丸は城郭の中心的な構築物（城主の居所、天守台あるいは天守閣）の設けられた場所のことで詰ともいいます。
- ★堀 切 人が登りやすい尾根筋を攻め登られないように掘った堀で、山城では一番の基本となるものです。堀の断面形がV字形の「薬研堀」とU字形の「箱堀」があります。また、水が張られている堀を「水堀」、水のないものを「空堀」といいます。
- ★豎 堀 山の斜面を高い所から低い所に向かって掘った堀のことで、斜面を横に移動できないように防御する目的で造られたものです。
- ★横 堀 曲輪の外縁に沿って周りを囲む堀のことで、最も発達した堀です。
- ★畝状豎堀群 豎堀を密集して斜面に築き、群として並べて面を被う遺構です。
- ★虎 口 防御された城館の出入り口にあたり、門のあった場所のことです。
- ★切 岸 曲輪の周りの斜面を人工的に急斜面に成形し直し、登りにくくした場所のことです。





■ 編集・発行

（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター

■ 発行年月日

2006年10月16日